

9月に行われた第1回読書会では、愛媛県出身の作家である田丸雅智さんの短編を読み、互いに意見を共有しました。今回は、図書委員が書いた感想や意見を紹介します。図書館特設コーナーはショート・ショート特集です。ぜひ図書館に来て、様々なショート・ショートを楽しんでください。

『海色の壘』^{びん} 田丸雅智著

主人公がある日ふらりと立ち寄った深夜のバー。酒の種類が一つしかないというメニューを広げ、梅酒を頼んだと思ったが、それは「海酒(うみしゅ)」。口に含んだとたん、目の前に海の景色が広がって……。

この『海酒』という物語で、海の記憶が刷り込まれた、ビーチグラスという単語を見て、昔に取れたビーチグラスで作られた海酒の方が、今取れるビーチグラスで作られた海酒より、きっと深くより良い味わいがあるのだと感じました。これからとれるビーチグラスからはもっといい味の海酒が作れたらいいなと思いました。(1年男子)

すごく胸が苦しめられる作品だったなと思いました。もう二度と楽しかった過去に戻れず、思い出すことしかできない、ということにとっても辛くなりました。だから、いま、この一瞬を大切に、大事にしていきたいと思いました。そして「最後」という言葉を恐れずに、生きていきたいです。(1年女子)



読んでいる側に語りかけてくるような文章で始まっていたので、とても物語にのめり込むことができました。海が好きだからこそ、海酒の中に当時の三津の海で過ごしていた記憶が鮮明に映し出されたのではないかと思います。また、自分が仕込んだ海酒の中にも、三津の町での記憶があり、本当に三津の海が大好きだったという気持ちが伝わってきました。昔の記憶や感じたことが分かりやすく書かれていたので、とても読みやすかったです。(2年女子)

この話からは幻想的なイメージをもらいました。読んでいて、高校生には「あのころ」を思い出すというものはまだ早いんじゃないかと思いましたが、筆者の言葉に操られ、強制的に海の情景を思い浮かべさせられました。僕は山育ちなのに。物語というものは、人の心を惑わす一種の芸術なのかも……と思いました。(2年男子)

<本校図書館にある田丸雅智さんの本>



「マタタビ町は猫びより」

猫が出てくる多くの話を、ゆったり・ほんわかした気分で楽しめる。猫の話に浸りたい欲求をすぐに満たしてくれる本です。

猫好きの人なら、表紙だけを見て貸りても、絶対に後悔はしないと思います。1話5分程度で読み切ることができるので、朝読にもぴったりです。

次回の読書会は11月を予定しています。図書委員以外の人でも大歓迎です。ぜひ参加してください！